

初めてのクルーズ旅行

期間：2018年6月8日（金）～6月15日（金）

コース：神戸～那覇～石垣島～基隆（台湾）

天候：通して晴または曇

参加者：妻と二人

古希の記念として、人生初の大型客船によるクルーズ旅行だった。今までに経験したことのない別世界で夢のような8日間の生活だった。クルーズ旅行が癖になった人は十数回も行っており、早速次回を予約した人もいた。なお、予約は1年前に行ったが、半年前には満席となる。高額な部屋から埋まっていくそう。

船の名前はダイヤモンド・プリンセス。イギリス船籍であるが長崎の三菱造船所で造られた日本製だ。過去にライン川や潜戸観光のクルーズの経験はあるが船の規模が違う。長さ300mもあり15階建ての巨大なビルのような。乗客

2700人に乗員・スタッフ1100人が付いた手厚いサービス。阪急交通社の主催で基本料金が下から2番目のランクの5階プラザ・デッキで188,000円（最上クラスは48万円）、沖縄、石垣島、台湾のツアー料金が30,000円、サービス料が7日で10,400円、海外政府関連諸税9,200円、海外保険8,800円、インターネット利用料9000円の合計23万円だった。船で会った人の中には、アメリカの旅行社にネットで申込み1日当たり1万円で今回は8万円と格安とのこと。海の見えない部屋で十分、船のイベントを最大限に活用し、全て個人単位で好きな観光地を廻るそう。

ラッキーなことに全ての日程を通じて天候に恵まれ、気がかりな台風は関東方面へ逃げてくれた。沖縄では晴れて日差しが暑かった。石垣島は雨が心配されたが曇りで雨具は不要だった。ここでは栈橋に付けずはしけのボートに乗ったが、高波でジェットコースターのように揺れ海水を浴びた。台北では前日が雨、翌日以降も梅雨前線のかかる狭間で一日だけ晴れてくれた。雨は夜の間だけ降り、日中は甲板上で快適に過ごすことができた。プリンセス号は巨大で大きな波でも揺れは少なかった。



食事はフォーマルを含むディナーを、5階のサボイ・ダイニングの指定席で摂った。接客はアメリカ人で英語の単語で注文しないと、日本語では違った料理が出るがあった。朝食・昼食は14階のホライゾン・コートで、日中はいつでも自由に食べることができた。洋食と日本食のバイキングで、私は洋食に飽きるとご飯、お粥、味噌汁、焼き魚を利用した。インフアーナショナル・ダイニングでのアフタヌーン・ティーは各種ケーキが良かった。

運動環境は十分に整っていた。プールが4種類（屋内、屋外、温泉など）もあり、渡り歩いて泳ぎを楽しんだ。休憩でチェアーに寝そべて本を読んだ。近くにはアイスクリーム屋やピザ屋もあって食べ放題だった。ジムではトレッドミルによるウォーキング、クロストレーナーによる階段登りをした。エアロバイクサイクルやボート漕ぎもあった。16連



のトレッドミルにはテレビも付いていた。広い海を眺めながら運動するのは、爽快で気持ち良かった。スプロラズラウンジでは、インストラクターの指導でズンバとソーシャルダンスにも挑戦した。ズンバはミラーリングで踊るのでコツを掴めば楽しめそうだ。温泉「泉の湯」は有料で、湯船が4種とサウナで屋外に温泉プールもあった。プールに飽きるとチェアーに寝そべて本を読んだりした。

情報は主に船内新聞のプリンセス・パターから得た。これに翌日の催し物の全て、ドレスコード、ショップ・施設の営業時間が載っていた。阪急交通社からはオプションツアーとその集合時間・場所、下船準備などのチラシが配られた。インターネットを有料契約し、Wi-Fi経由でスマホやタブレットでメール、WWW、天気予報などの情報が得たが、衛星回線を使うため応答が遅かった。部屋のテレビではBS1、BBCなどのチャンネルを見ることができた。映画もビデオで見る事ができ、最新の「猿の惑星」を英語で楽しんだ。

ショーやコンサートは県民会館大ホールのように大きいプリンセス・シアターであった。アメリカの黒人歌手のコンサートは満席だった。ジャズコンサートはエクスプローラーズ・ラウンジやクルーナーズ・バーで行われた。ニューオリンズから来たバンドが特に良かった。ワインを注文したら7\$だった。中央のアトリウムでは、シャンパンショーやさよならショーなど様々な催しが華やかに行われた。



沖縄では天気に恵まれ過ぎて暑かった。ガイドさんは地元出身の30代後半に見えたが、スタイルが良く話もうまかった。「おきなわワールド」の玉泉洞は美しい鍾乳洞が1kmも続き、石筍が幻想的で素晴らしかった。上の大きなおみやげ専門店街で土産に沖縄名物の宮廷菓子チンスコウを2個買った。エイサー広場では沖縄芸能のショーがあり、獅子舞と太鼓のエイサー踊が良かった。首里城は2回目の訪問だ

ったが、正殿の中の見学は初めてで良かった。沖縄庭園は珊瑚の石で樹木は南国風だった。廊下に除き窓があり城壁が見えたが、これが世界遺産になっている。沖縄戦で日本軍はこの城の地下に司令部を置いたため、攻撃の的となり城は消失したそうだ。

石垣島は大型船が棧橋に着けられないため沖合からボートで渡ったが、波が荒く20分間ジェットコースターのような感じだった。バスで登ったバナナ岳からの眺めは良く、竹富島が見えた。石垣市の町の沖には巨大なプリンセス号が浮かんで見えた。食事はアグー豚のシャブシャブが美味しかった。「やいま村」ではいきなりリスザルの馴れ馴れしいお出迎えで、2匹同時にぶら下がられた。山仲間へのお土産にミント味黒糖を買った。七色に輝く海の川平湾は美しい青で、浜は珊瑚が砕けた白砂が輝いていた。グラスボートでの珊瑚礁は素晴らしく、真っ赤なクマノミがアコヤ貝の中を泳いでいた。車道の両側にはサトウキビ、ヤシ、パイナップルの畑と水田が広がっていた。石垣港に白い巡視艇が7隻停泊していた。そういえばこの島は尖閣諸島に最も近い、いわば最前線だ。のどかな島の一方、中国との国境という緊張感も走った。

台湾の入口は基隆（キールン）港で、台北の玄関口とベッドタウンとして発展している。この港は奥深くまで大型客船が入り込むのには驚いた。しかも隣には、ダイヤモンドよりもっと大きいマジスティック・プリンセス号が停泊していた。ここで下船しツアーバスに乗り換え、まずは蒋介石を祀った中正記念堂のある忠烈祠を目指す。ちょうど衛兵の交代時間で、背が高くハンサムな衛兵たちが整然と交代式を行っていた。観光客も彼らの後ろに付いて盛んにシャッターを切っていた。次は龍山寺へのお参り、台湾の人々は一心に祈り信心深い。私たちも線香を上げ、おまじないの板を投げたりした。そして車窓から高さ508mで世界2位の高さの竹をイメージした台北101ビルを眺めながら、昔金鉱のあった町「九份」へ。坂を登ると赤い提灯にたくさんぶら下がった「阿妹茶楼」が現れ、そこは映画「千と千尋の神隠し」の世界が広がる。宮崎駿も来てスケッチをして帰ったそうだ。その向かいのレストランで昼食、野菜炒めとイカリングが美味しかった。食後にごった返す商店街へ入り、まずはパイナップルケーキ2箱を500元（2000円）でゲット。長い商店街を反対端まで歩き、本場の凍頂烏龍茶4種をクレジットカードで購入し5000円ぐらいだった。ガイドの蔡晶晶さんは地元の人だが、日本語が達者でユーモアもある上手な案内だった。ツアーに大いに満足して16時頃に母船へ帰った。



台湾から神戸への帰路では3日間の船上生活となったが、イベントが多く忙しかった。フォーマルでの晩餐会は2回目だが、背広ネクタイやドレスでよそ行きの気分となる。記念にアトリウムで階段でタイタニック風の記念写真を撮ってもらったが、カメラマンからは「手を握り合せて目を見つめて」などと指定され、恥ずかしい思いをした。この時の写真は門外不出だ。ディナーではレストランのスタッフが総出でパレードし盛り上がった。私は寝てしまったが夜中には打ち上げがあり、

アトリウムで天井の風船が一気に解き放たれ、賑やかな演奏会や踊りなどで盛り上がったそうだ。画廊の絵や高額な装飾品もバーゲンで次々と売れていた。

全ての日程を終えて神戸港で下船、帰国の手続きを終えて外に出ると現実の世界に戻った。新神戸で早便に変更し、伯備線に乗り換えると多少の疲れを覚えた。いろいろな旅行者に出会い話をしたが、家の電気・水道を止めて連続でクルーズを続けている人もいるらしい。しかし、これが癖になると人生をかえってダメにしてしまうのでは、という疑問も湧き自分はこれっきりにしたいとも思った。中には人生の最後をクルーズで過ごす人や、肉親を散骨するため参加する人もいるらしい。しかし私にとっては山小屋生活の方があっている気がする。相当に刺激的な旅行だったので、しばらくは家でゆっくりと過ごしたい。

(終)